
WORLD SCHOOLへようこそ！

くるんは正義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WORLD SCHOOLへようこそ！

【Nコード】

N6933N

【作者名】

くるんは正義

【あらすじ】

世界的学校WORLD SCHOOLに転入することになった本田菊。彼を中心に繰り広げられる彼らの学校生活を御覧あれ！

友達が来ました。

「ここが…。」

かの有名な学校。

「World School」噂では、世界各国の著名人の子息や現役芸能人、果ては石油王の娘や息子まで…まあ、とにかくごく地位のある方々が通う学校なんだとか。

そんなすごい噂に引けを取らないこの学校の外観は、まさに「World」な学校ではないだろうか。

…しかし…何故私…ここに入学するのでしょうか？

小さな頃に両親は他界。親兄弟の顔など覚えていない。

祖母の話では、自分にはそれはそれは素晴らしい両親がおり、兄弟もいると聞いている。

自分には、兄は一人。弟もいるんだとか。

しかし、それは自分にとっては何の実感も湧かないただの「言葉」でしかなかった。

顔も知らない兄弟に、気を向ける暇などなくお世話になっている祖父母に迷惑をかけまい、と今まで精一杯やってきた。

おかげで、家事全般はプロ並み。

ある程度の仕事なら楽にこなせるようにまで成長した。

不便でもなかったし、とても幸せだった。

これは譲れない。

今年から私も高校生だと、先日受けた公立高校の結果を待ち望んでいた時のある日。

この世界的学校「World School」から入学許可が降りた、という通知が届いた。

私も最初は、何かの間違いだと思ったが名前は間違いなく「本田菊様」宛てになっており、封を切ると中には「授業料免除」、「生活費普及」、「その他なんでも出す」と、まあ怪しいを具現化したような文字の羅列。

しかし、そんな高待遇はめったにあるものではない。それに、祖母ももう随分な歳になる。

これ以上の負担は彼らに掛けられない。

と、こんな感じで私はここに入学する事を決めた。

――決めたのだが…

「いくらなんでも…広すぎ…ではないでしょうか…」

敷地内に入っている事は確かだし、学校の校舎（らしき建物）は見えるのだが目的地であるのは“体育館”である。

そう、今日が入学式なのだ。

遅れる訳にはいかない。何故なら目立ちたくないからである。

「困りました…」

方向感覚には自信があると高をくくっていたのがまずかった。

体育館らしき建物などどこにも見当たらない上に、生徒の1人も見

当たらない。これでは、道を聞きたくても尋ねられないではないか。

「ヴエ！ 君一年生？」

「うわああ！？」

突然後ろから何やら謎の擬音を発した声の主はそれはそれは可愛らし……いえ失礼、男性にこの表現は的確ではありませんね。柔らかなオーラを纏った少年（青年？）がいた。横から生えたくるんとした寝癖？がやけに印象的だ。

「ヴえ、ご、ごめんよ！ 驚かすつもりなんてなかったんだよ！？
ね、君一年生？ 見ない顔たよね？」

「あ、はい。 高等舎の一学年に転入して参りました。」

「こ、高等舎？！ ヴえ……年上だあ！ るーと！ルート！」

彼は何やら後ろを振り向きながら誰かを呼んでいるようだった。しばらくして、彼が呼んだ「るーと」さんが到着し、こるああ！と怒鳴られながら彼はまた「ヴえ」と泣いていた。

「ひとりで行動するなと何度言えば分かるんだフェリ！ 地図も読めないお前がひとりで目的地にたどり着く訳が、」

「ヴえ、ごめんよルート！」

「あのお？」

話を遮ってしまうのは申し訳なかったが、緊急を要する。

「ん？ ああ、すまない。こいつが何かしたか？」
「るーとさんはふえりさんを指指しそう聞いてきた。」

「いえ。ふえりさんは声を掛けて下さっただけです。ところで、申し訳ないのですが、るーと…さん、と仰いましたか。道を尋ねたいのですが、お時間よろしいでしょうか？」

「あ、ああ。特に急を要する用事はない。どこに行きたいんだ？…あ…すまん、何て呼べばいい？」

「こ、これは失礼いたしました！！」

道を尋ねておいて名乗らないなんて礼儀知らずもいいところだ。師匠がいたら相当しかられたに違いない。

「私、本田菊と申します。この度、この学校の高等舎一学年に転入することになりました。日本人です。よろしくお願いします。」

一通り挨拶をすませると、「俺は、」と話そうとした、るーとさんを遮りまたあの特徴的な鳴き声を発してふえりさんが話しだした。
「俺はね、俺はね！ フェリシアーノ…ヴァルガスっていうんだ…！ イタリア人で、パスタとピッツアとジェラートが大好きで、女の子も大好きなんだ…！それからそれから、」

マシンガンのように話しだしたフェリシアーノさんを片手でわしづかみにして、るーとさんがフェリシアーノさんを制した。
慣れている。

「人が話そうとしているのに、遮るな！ それに、彼は急いでいるようだし、手短にするのは常識だろうが！」

「ヴェー!? そうだったね、ごめんよ」

「いえ。おきになさらず。」

にこりと微笑み返せばフェリシアーノさんは一瞬動きっぱなしだった手を止めて、じいーと真剣な表情で見つめ返してきた。

「ヴェー…」

「?」

「あー…俺の名前はルートヴィッヒ。ドイツ出身で、中学校舎の一年だ。こいつも同じだ。」

「なるほど。失礼ですが、お二人は幼なじみか何かですか?」

「あ、ああ。割と小さい頃から世話しているな。」

「なるほど、すごく…羨ましいです。」

小さい頃から遊び暇などなく、この堅い性格が原因か友と呼べる方は片手で余るほど。

そんな私には、彼らはとても眩しく見えた。

「ヴェー!じゃあ、菊も俺達と今日から幼なじみだよ!」

「え?」

ニコニコと微笑むフェリシアーノさんはいい考えだ、ね、ルートどー?と尋ねていた。

「うむ。幼なじみというのは無理かもしれないが、友人として…
どうだろうか。」

ゆ、うじん…

「ヴェー！ 菊く今日から俺たち友達だよ！」

フェリシアーノさんは嬉しそうにぴよんぴよん跳ねながら私の手を握り上下に動かした。

暖かな木漏れ日に照らされて、入学式が始まる合図を耳にしながら私は彼の手を握り返し、頭を下げてから

「よろしく…お願いしますね？ ルートさん、フェリシアーノさん。」

と微笑めば、フェリシアーノさんはフェリでいいよーと笑い、ルートさんは、うむ。と言って顔を反らした。

「こんな出会いがあるのなら、遅れるのも悪くはない！」

友達が出来ました。(後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございました！

また会える日を楽しみにしてます(^ ^)

コメントとか、い、いれて欲しいだなんて、思っ
てねーんだからなっ！(byアーサー)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6933n/>

WORLD SCHOOLへようこそ！

2010年10月11日13時58分発行